３．田代岳の作占いに見る歴史的風致

田代岳で行われる作占いには、秋田県北部地域から青森県南津軽地方までの広範囲にわたり、たくさんの登山客が訪れる。また、古くから建立された山頂の田代山神社は、厳しい気象条件にさらされ何度も被害を受けてきたが、その都度関係者が再建、修理を重ねてきた。

田代岳を望む市内の各地には、今でも豊作を祈願するために地域の人々が建立した田代山の神社や石碑が残っている。

田代岳山頂と池塘

（１）自然環境

白神山地に属する田代岳(標高1,178m)は、秋田・青森の県境近くに位置し、西方に連なる雷岳、烏帽子岳、茶臼岳と共に形成する四山の連峰である。

主峰田代岳は眺望が開けていて、岩木山や八甲田連峰、岩手山、八幡平、森吉山といった峰々が展望できるほか、９合目の標高約1,000m地点に広がる高層湿原には、大小合わせて120以上の池塘が点在し、ミツガシワをはじめとする多数の高山植物が一帯に生育している。

６月から８月にかけては、湿原一帯が百花繚乱の花畑となることから、「雲上のアラスカ庭園」とも称され、多くの登山客で賑わう。

大広手、荒沢、上荒沢、薄市沢の登山口周辺には、滝、渓流、ダム湖といった景勝地もあり、周辺一帯は昭和50年(1975) １月に県立自然公園に指定されている。

９合目池塘と周辺の山々

（２）周辺地域の風土

田代連峰の東西を南下する岩瀬川と早口川が米代川に合流し、その山間の川沿いに開けた農地に集落ができ、田代地域が形成されてきた。古くから米代川流域の舟運、羽州街道の中継地として機能し、江戸時代には田代岳周辺の鉱山開発が活発に行われるようになった。

その数は、文政期(1818～1830)の記録によると、秋田領内の鉱山数で第３位(山瀬地区22箇所)と第４位(早口地区20ヶ所)を占めるほどで、長慶金山や赤倉

五色滝

鉱山の硫黄、比立内の鉛石など良質な鉱山に恵まれ、鉱石は馬を利用して米代川沿いまで運び、舟運により大巻港から積み出した。

その後、森林資源の需要が高まり奥地まで森林軌道が敷設され、早口駅まで搬送された木材は、鉄道を利用して各地に出荷された。やがて、木工、鉄工などの関連産業も興り、生活が安定するにつれ、この地域には、様々な民俗芸能や信仰行事が生まれた。今なお受け継がれているものに、農業信仰に基づいた田代岳の作占い、山田・蛭沢集落の獅子踊り、代野集落の番楽・ニッキなどがある。

旧田代町(地元)の町名が「田代岳」に由来することからも、信仰とふるさとの象徴であ「田代岳」への愛着の深さがうかがえる。

（３）田代山神社と田代山信仰

①田代山神社の歴史

田代岳は、山そのものが御神体で、昭和初期までは霊峰田代山と呼ばれていた。

山頂の田代山神社には「白髭大直日大神」が祀られ、９合目には「山の神」の御神体、「大日貴命」と「小彦名命」の御神体がある。

毎年、半夏生（７月２日頃)に９合目の湿原で行われる「作占い」が信仰の対象となっており、秋田県北部から青森県南津軽地方に及ぶ広汎な信仰圏から大勢の登山客が訪れる。

田代山神社の歴史は古く、次のような様々な記録が残っている。

・【仁寿２年(852)】慈覚大師円仁の使僧が十一面観音を勧進して山岳仏教の霊山として開山(秋田県神社神道史)

・【弘長２年(1262)以前】開基常覚院による創建(綴子神社の縁起由来書)

・【建武元年(1334)】陸奥兼出羽守北畠顯家による長慶金山開発時に再建(秋田県神社神道史)

・【天正年間(1573～1591)】創建(社伝)

また、地元には「津軽の猟師彦之丞が、獲物を追って田代岳山頂まで来たところで、幾多の水田を発見し、驚いていたところに白髭の白髪で白衣の翁が現われ、この翁を白髭大神として祀ったのが、田代山神社の始まり」と記された由来書が残されている。

田代山神社

遮るもののない山頂の環境は想像を絶するほど厳しく、歴代の社殿は幾度となく自然災害による損傷を受けてきた。近年の記録では、昭和61年(1986)に落雷で焼失し、平成３年(1991)の台風19号では全壊しているが、いずれも関係者の尽力により翌年に再建されている。

社殿の傍らにある石造りの小祠（しょうし）は、明治43年(1910)に奉納されたものである。

また、９合目湿原の南側木道脇には、自然石に「山の神」と刻まれた御神体があり、更に南側の前岳の端にも「大日貴命（おおひるめむちのみこと）」と「小彦名命（すくなひこなのみこと）」と刻まれた１ｍ以上もある大きな自然石の御神体がある。年代は詳しく分かっていないが、木道の無かった時代から残る信仰の足跡である。

連山をなす西方の烏帽子岳山頂には、明治41年(1908)に奉納された白髭大神の石像がある。小祠の奉納者が旧大館市、石像の奉納者が旧比内町の在住者であることからも、山の信仰が遠くまで及んでいたことがわかる。

山頂の小祠
明治 43 年奉納

「山の神」御神体

「大日貴命（おおひるめむちのみこと）」と「小彦名命（すくなひこなのみこと）」の御神体

烏帽子岳山頂の白髭大神石神像
「明治四十一年旧六月吉日」　建立

②各地に残る田代山神社や石碑

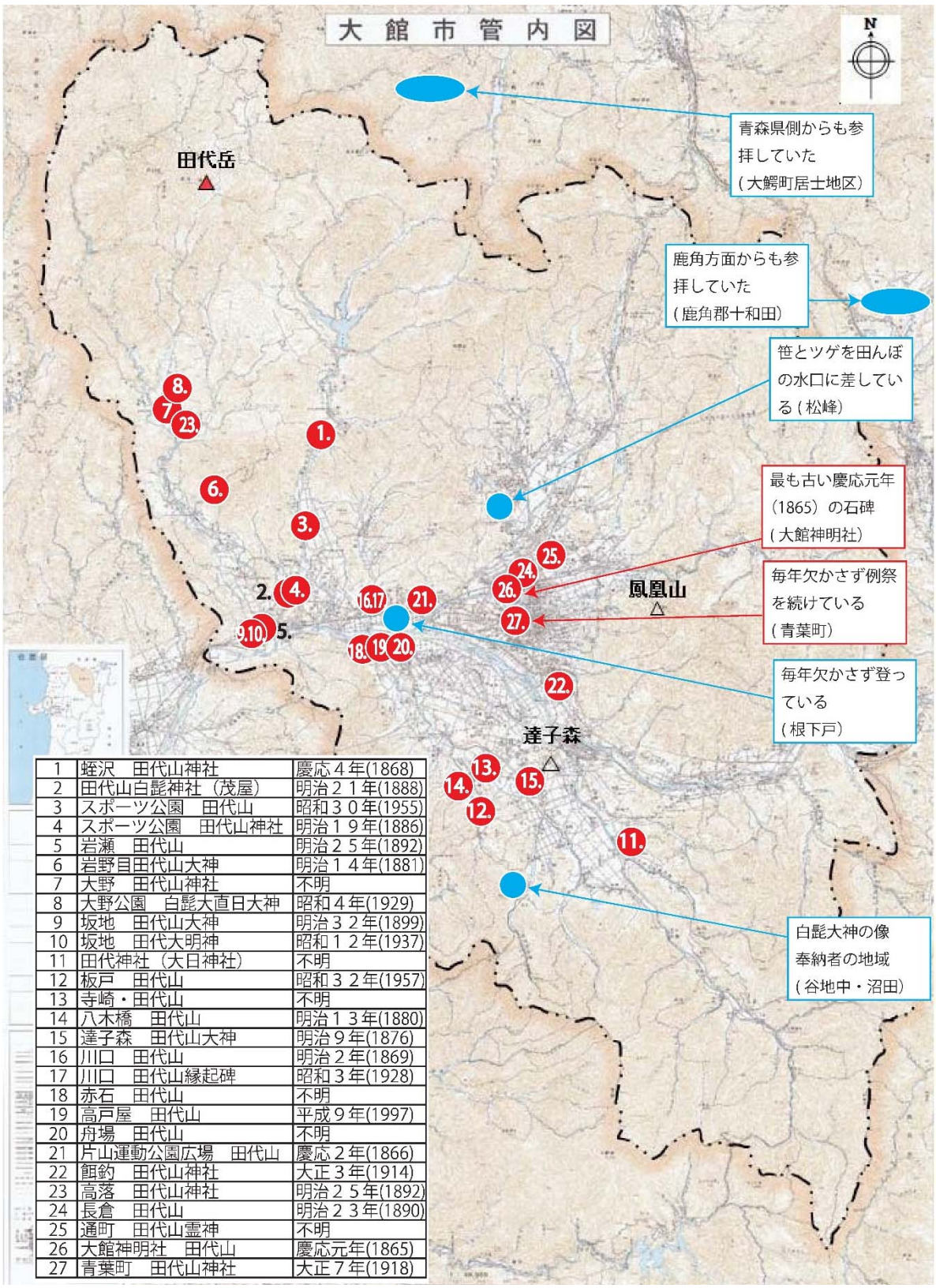
農民がこの地方のほとんどを占めていた時代に、豊作を祈る信仰心の篤い信者たちは、田代岳詣（まい）りを重ねる一方、集落に程近いところに里宮や信仰碑を建立し「田代山」を祀ってきた。今も市内の広い範囲に「田代山神社」や「田代山」などと刻まれた小社（しょうしゃ）や石碑が残っており、その建立年を見ると古くからの信仰が伺える。一番古い年代は、慶応（けいおう）元年(1865)に建立された大館神明社境内の石碑である。

大正７年（1918）の御神体を祀る青葉町の田代山神社では、田代町・南町の氏子が、毎年欠かさず６月５日に例祭を続けている。

今も残る「田代町」の名前は、地元の神社が由来ではないかと言われている。

青葉町の田代山神社例祭

分社した御神体



1	蛭沢　田代山神社	慶応４年(1868)
2	田代山白髭神社（茂屋）	明治２１年(1888)
3	スポーツ公園　田代山	昭和３０年(1955)
4	スポーツ公園　田代山神社	明治１９年(1886)
5	岩瀬　田代山	明治２５年(1892)
6	岩野目田代山大神	明治１４年(1881)
7	大野　田代山神社	不明
8	大野公園　白髭大直日大神	昭和４年(1929)
9	坂地　田代山大神	明治３２年(1899)
10	坂地　田代大明神	昭和１２年(1937)
11	田代神社（大日神社）	不明
12	板戸　田代山	昭和３２年(1957)
13	寺崎・田代山	不明
14	八木橋　田代山	明治１３年(1880)
15	達子森　田代山大神	明治９年(1876)
16	川口　田代山	明治２年(1869)
17	川口　田代山縁起碑	昭和３年(1928)
18	赤石　田代山	不明
19	高戸屋　田代山	平成９年(1997)
20	舟場　田代山	不明
21	片山運動公園広場　田代山	慶応２年(1866)
22	餌釣　田代山神社	大正３年(1914)
23	高落　田代山神社	明治２５年(1892)
24	長倉　田代山	明治２３年(1890)
25	通町　田代山霊神	不明
26	大館神明社　田代山	慶応元年(1865)
27	青葉町　田代山神社	大正７年(1918)

田代山信仰の広がり（田代山の信仰・神社・石碑）

③田代山信仰

古くからこの地には、田代山神社へ参拝して雨乞いする風習があり、寛政（かんせい）７年(1795)と天保（てんぽう）７年(1836)の旱魃（かんばつ）の年に、大館市花岡の肝煎（きもいり）、鳥潟半左衛門(扇峰)一行が雨乞いをした紀行文『田代山道の記』が残されている。祈りは見事に功を奏し、帰路に霰まじりの小雨が降りだしたと記され、「われわれが命に替えん一夕立」と句を詠んでいる。

また、津軽側には江戸期の平尾魯仙の著書『谷の響』に次の記録がある。天保（てんぽう）10年(1839)に連れだって田代岳に参詣した百姓３人が、帰りに６尺もあろうかという大女に遭遇し、滝壺で水を巻き上げられて大雨となり逃げ帰った。「山の神」は、女の神で嫉妬心が深いため、田代山は昔から女人禁制の山とされてきたのである。

白髭大神（しらひげおおかみ）は、田神、水神、作神ともいわれていて、田代岳は雨乞いの山として広く知られるようになり、「点々と水を湛（たた）えた池塘（ちとう）の守護神である白髭大神に祈願することで、豊饒（ほうじょう）の雨を田んぼに授かる」といったこの地方独特の農業信仰が、根付いたものと考えられる。

今でも半夏生（はんげしょう）には、豊作を祈願する農業者や安全・健康を願う登山者たちが、山頂の田代山神社を目指し、参拝するのが年中行事になっている。

白髭大神絵図（綴子神社所蔵）
田代山神社に祀られている白髭大神のモデル

（４）田代岳の「作占い」

①作占いの時期と準備

田代山神社の例祭は、毎年、半夏生の前日から２日間の行程で神事が行われる。

前日は、早朝に宮司と氏子数名が山頂に登り、宵祭りと本祭りの準備に取り掛かる。

神社内を清掃し、玉串奉奠（たまぐしほうてん）用のクマザサを用意、鳥居にしめ縄の取り付けなどを済ませ、入念に準備を行う。

夕方近くになると９合目湿原へと下りて行き、いよいよ池塘（ちとう）で「作占い」を行うのである。

池塘のミツガシワ

②作占いの手順

始めに、山頂に一番近い**「晩稲(おくて)の神の田」**で、晩生種の稲の豊凶を占う。

次に下方にある**「中稲(なかて)の神の田」**で、中生種の稲の豊凶を占う。

神職は、ミツガシワを稲に見立てて、茎の太さ、長さ、花(穂)の付き方、実の大きさなどを観察して判断するという。

次に**「水量見(すいりょうみ)の神の田」**と称する隣の大きな池塘(ちとう)で水量占いを行う。池塘の中には岩があり、その岩の見え隠れで水量を占い、実際に手を入れてみて水温を探り、秋の稲刈りまでの田の水の具合や洪水、冷害などの災害の有無を占うのである。

続いて、田代山全体の御神体とされる**「山の神」**の前で祈りをささげる。

この石碑は、木道のすぐ側にあることから、登山の無事を祈って参拝する者も多い。

かつては、最初にこの石碑を拝んでから「作占い」に入ったとされている。

その後、湿原の一番南側の端にある**「大日様と薬師様」**の御神体で、これから１年間の里に降りかかる災い防止と皆の健康を祈願する。

次に、来た道を引き返し、木道を周回する形で**「早稲(わせ)の神の田」**に行き、早生種の稲の豊凶を占う。

晩稲の神の田

中稲の神の田

水量見の神の田

「山の神」での神事

「大日様と薬師様」での神事

「早稲の神の田」

三五の池

最後に、一番水深があるとされる池塘の**「三五（さんご）の池」**という神の田で、「賽護打ち（さいごう）」を行う。「賽護打ち」は、５個の賽銭に紙で作った羽根を穴にとおして付け、１個ずつ投げ入れて、沈み加減で風・水・早稲・中稲・晩稲を占う。

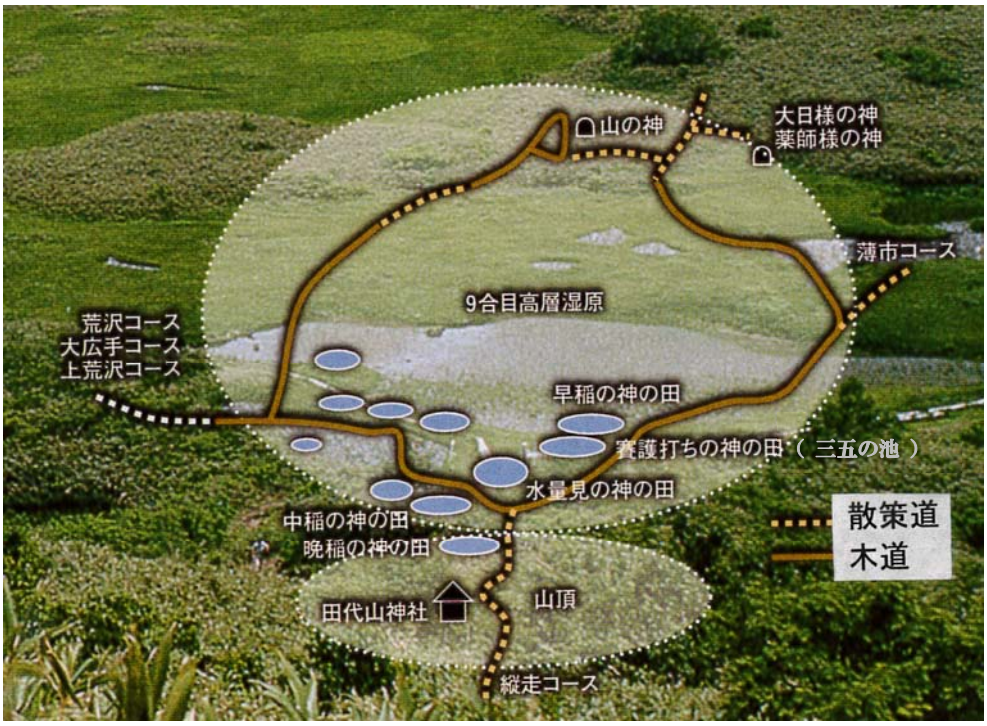
賽護打ち（投げ入れる）

賽護打ち（着水）

賽護打ち（沈み加減を確認）

「賽護打ち」は占いの集大成であり、各種神の田での生育状況を加味して豊凶の最終判断を下すことになる。

こうして湿原での「作占い」の神事は全て終了する。



山頂周辺図

③宵祭り

湿原での神事を終えると山頂の社殿に戻り、田代山例祭の宵祭り神事を執り行う。湿原から山頂へ戻る間は、誰も神官と口を聞いてはならない習わしである。

夕方になり、辺りが薄暗くなる頃、宮司は、山頂社殿において氏子や神社関係者が参列するなか、奥殿に奉られている御神体「白髭大直日大神」の前で神事を執り行う。

神事が終わると、宮司から今年の「稲の作占い」の結果が、氏子たちに伝えられ、宵祭りの神事はこれで終了する。

神殿祈祷

④本祭りと参拝登山

夜が明けると、早朝から社殿において田代山神社例祭の本祭りの神事が執り行われる。

参拝者は、早朝から続々と山頂目指して登ってくる。

本祭りが行われる半夏生の日は、草径に稲魂（霊）の籠る日とされ、田んぼの稲の収穫量を左右する大切な時期であることから、作占いは稲の生育過程を判断する目安ともされてきた。

笹とつげ

地元は勿論、近隣市町村や隣県などから沢山の参拝者が訪れ、農民や篤信の崇拝者が小笹を神殿に捧げて、お祓いと豊作を祈願して、それを持ち帰って田んぼの水口に押し立て豊作を祈願するのが習わしとなっている。

今も半夏生に田代山神社を訪れる参拝者たちの中には、昔の風習を守り、束ねた小笹とつげを宮司に祈祷してもらい、作占いの結果を聞いて下山の途に就く人たちがいる。持ち帰った小笹とつげは、一旦家の神棚に置き、翌日に田んぼの水口に供えられている。

田んぼの水口の笹とつげ
（松峰地区）

⑤参拝登山の歴史と登山道

参拝登山は、田代山神社の傍らにある小祠が建立された明治 43 年(1910)頃にはすでに始まっていたと考えられる。

大館市根下戸町山岳会が平成３年に発行した記念誌には、会員たちが昭和 20 年代から実際に行った参拝登山の記録の他に、祖父母から伝え聞いた明治・大正期の記憶も記載されている。

毎年欠かさず登っている根下戸集落
（山岳会）の皆さん

明治の頃は、午前１時過ぎに集落を徒歩で出発し、帰り着くのは夕方であったという。

大正期には、農家の機動力であった裸馬を数頭連ね、ほら貝を吹きながらの登山をしていた。

昭和 20 年代頃からは自転車、昭和 40 年代頃からはテーラー(耕運機に荷台をつけた農業機械)や乗用車などを使って登山口までたどり着いたという。

大変な思いをしながら、田代岳詣りを続けてきた記録を見ると、農家の人々の豊作を祈る強い気持ちが伺える。

地元紙、北鹿新聞の記事には、昭和 34 年(1959)「鹿角郡十和田の田村礼次郎さんが、三十才の頃から一年も休まず三十年間、田代岳に登り続けている」とある。

また、昭和59年(1984)に「青森県大鰐町(おおわに)の居土(いづち)地区の一団が、山頂に笛、鉦、太鼓を持ち込み、ねぶたばやしなど得意の曲と踊りを披露した」とあることから、田代山の信仰が広い範囲に及んでいたことがわかる。

かつての参拝登山は、居住地から延々歩いて登山口までたどり着き、それからの登山であったことから疲労困ぱいを極めたという。

現在では林道が整備され、大広手、荒沢、上荒沢、薄市沢が主要な登山口である。

いずれも登山口から約２時間から３時間で山頂に着く、比較的楽なコースとなっている。

明治 36 年 大館高等小学校の登山

馬を連れて登山した様子

登山口のテーラー

大鰐町居土(いづち)地区の一団

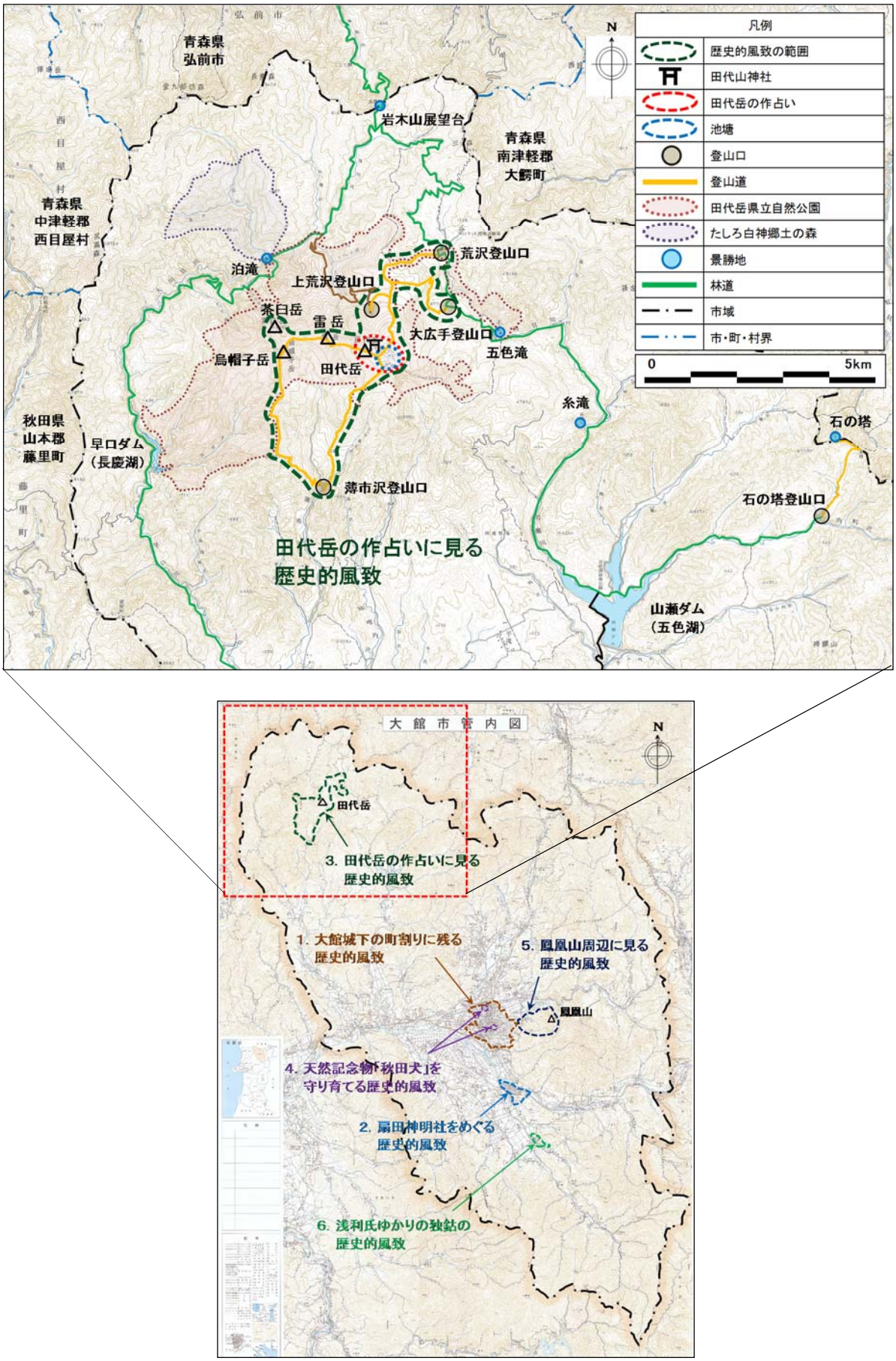
「半夏生」時の参拝登山者

（５）まとめ

田代山信仰は、古くからこの地方において、生きていくための食糧生産に懸けた農民たちの精神的な拠りどころとされてきた。

昔の農村集落では、集落全部の田植えが終わるのを待って、若者など体力のある代表者が田代岳に参拝したという。大事な田植えを終えて、集落を代表する若者たちが歩いて田代岳山頂を目指し、宮司から作占いの結果を承り、霊験あらたかな「笹とつげ」を集落に持ち帰る。集落では、若者たちの帰るのを待って、「早苗饗（さなぶり）」(田植えを終えた祝い)を行ったと伝えられている。

農民たちの豊作を祈る大事な文化として、田代山の信仰が共有されてきたことで、この地方特有の風土が醸（かも）し出され、今なお広い範囲に残され受け継がれている。今では農業者に限らず、五穀豊穣（ごこくほうじょう）や生活安寧（あんねい）を願う人々に、田代岳の作占いが受け継がれ、田代岳周辺に良好な歴史的風致が形成されている。



田代岳の作占いに見る歴史的風致の範囲

【コラム】

○田代岳周辺の伝統芸能

田代の御山に降る雨は、東西に流れて流域を潤し、地域独特の文化や信仰を豊潤に育んだ。ここで生まれた民俗行事は、五穀豊穣、豊年満作を祈願するもので、祭神を祀る神社に奉納されてきた。

①代野番楽（市指定無形民俗文化財）

代野番楽の起源は、江戸中期に旅芸人が村に立ち寄り、お世話になったお礼にと番楽を伝授されたのが始まりと伝えられている。

こうした番楽は、かつては近隣の中仕田、越山、山田の各集落にもあったが、現在は代野番楽だけとなっている。

代野番楽は、小正月の16日が幕開けで、11月10日の稲荷神社のお祭りを幕納めにしていたが、現在は毎年元旦に代野稲荷神社に奉納している。

昭和の中頃に一時休止したが、伝統行事の復活を願う地元有志により、昭和48年（1973）に代野番楽保存会が結成され、今日まで継承されている。

代野番楽

②山田獅子踊り（市指定無形民俗文化財）

山田獅子踊りの起源は、佐竹義宣が秋田に移封を命じられた慶長７年（1602）が始まりで、慶長15年（1610）に小場義成が大館城に入城の際に豊年満作・無病息災を祈って披露し、お褒めの言葉を受けて一層盛んになった。

戦時中は一時休止したが、昭和22年（1947）に再開し、昭和40年（1965）には若者有志による山田獅子踊り保存会が結成され、現在では集落全体で伝承している。

山田獅子踊り

③蛭沢獅子踊り（市指定無形民俗文化財）

蛭沢獅子踊りの起源は、安永年間（1772～1781）と文化年間（1804～1818）の２説があり、先祖の鎮魂供養に奉納されたのが始まりと伝えられている。

獅子踊りは、蛭沢地区集会所前で、お盆の８月13日と16日に奉納される。昭和30年中頃までは、蛭沢稲荷神社境内で神舞、集落の南側にある墓処で墓舞、蛭沢橋近くの民家の前で館舞が行われており、総勢50名が獅子踊りを披露していた。

昭和47年（1972）に蛭沢獅子舞保存会を結成して、後継者の育成に努めている。

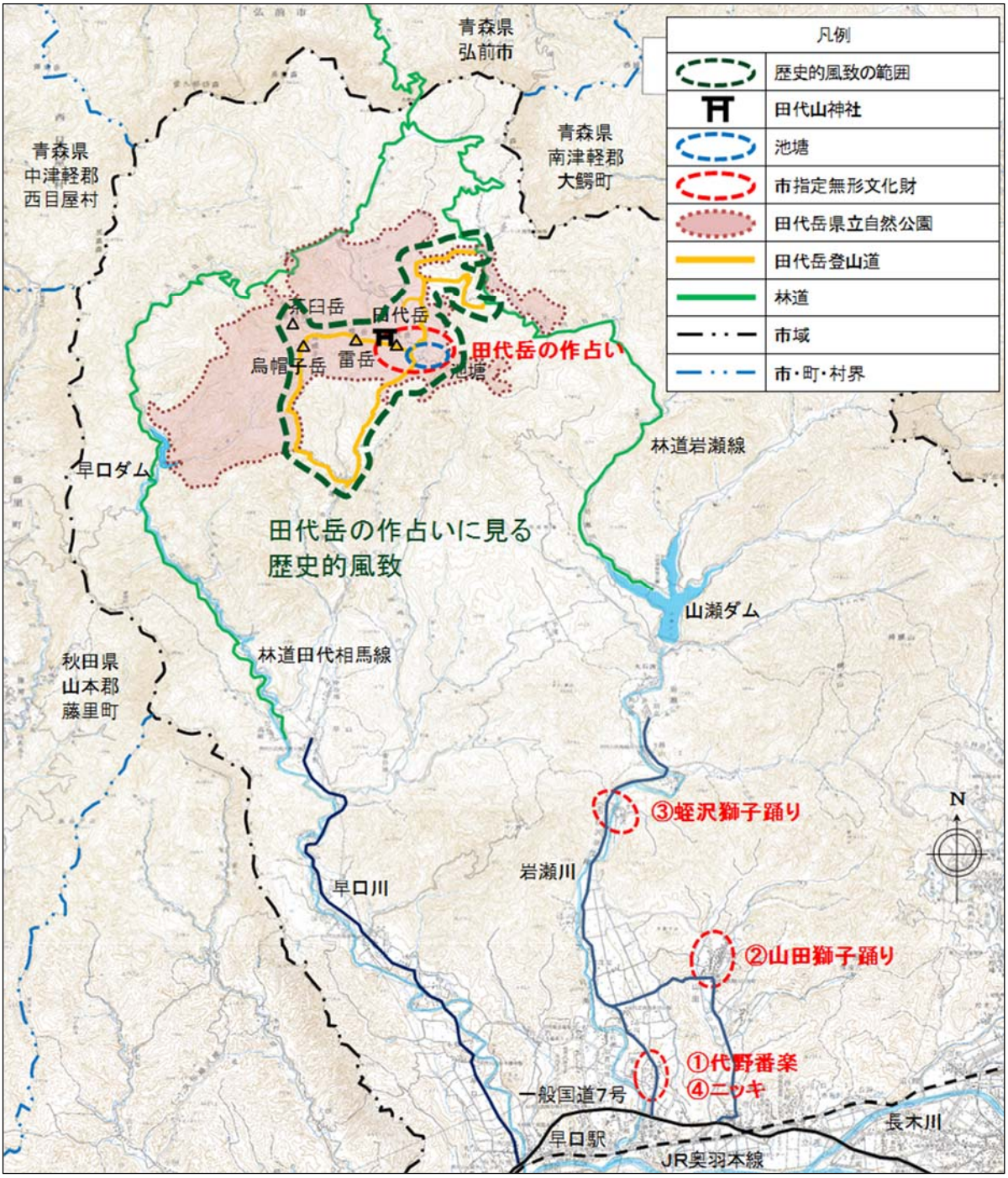
蛭沢獅子踊り

④ニッキ

ニッキは、代野集落に番楽とともに継承されており、その起源は、享保４年（1719）に無病息災を祈願して始めた民俗行事である。

ニッキは若木を意味し、新しい年の神の宿る木とされる。若木に新しい年の霊を宿らせ、集落内を祝福して歩くもので、当日は10歳前後の男児二人が頭にしめ縄と新木（ニッキ）の榊をつけて、墨を塗った顔で「ニッキ、ニッキ」と戸口で叫び、集落内を一軒一軒廻り、お初穂を貰う。最後に神社の庚申搭に頭のしめ縄を巻き付けて終了する。

以前は、小正月16日の朝６時頃に行っていたが、現在は元旦の行事である。



田代岳周辺の伝統芸能位置図